

IS学園の警備員な一夏くん

幽鬼桜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ボケくつと書いた作品です

色々と崩壊してますが気にしない人だけ見てください

5話 4話 3話 2話 1話

--	--	--	--	--

15 12 9 6 1

目次

1話

カンツ！カンツ！ドゴオオオオオオ！

現在IS学園のアリーナでは謎のISと二名の男女が戦っている

一人は中国の代表候補生であり二人しかいない男のIS操縦者の幼馴染みの少女、鳳鈴音

もう一人はブリュンヒルデの弟であり世界に二人しかいない男性IS操縦者の片割れ、織斑百春

二人は遮断シールドを破り突然現れた黒い全身装甲のISと戦い観客が避難する時間を稼いでいる

百「くっ！」

鈴「百春！」

黒いISがレーザーを放ち百春のIS白式の脚部に少しかすりバランスを崩す

鈴「キヤアッ！」

百「鈴！」

バランスを崩した百春に注意が向き黒いISに接近され殴り飛ばされ壁に叩きつけられる

百「クソオッ！」

鈴に追い討ちが無いようにするために百春がスラスタを全開にして黒いISに突っ込む

百「ハアッ！」

縦横斜めと縦横無尽に白式のブレード、雪片式型で切りつける
だがその程度では致命傷までには至らず裏拳で壁まで吹き飛ばされる

百「カハア！クソオッ！」

二人はISのエネルギーも半分まで減らされ戦える時間も少なくなっている

百「ハッ、ハッ、鈴まだいけるか？」

鈴「当たり前でしょ、倒すまでやってやるわよ」

？「大丈夫か！二人とも！」

百「兄さん！」

鈴「秋十！」

そこに新たに増援としてもう一人の男のI S操縦者織斑秋十がI S黒式を纏って加わる

秋「よし三人でアイツを倒すぞ！」

百鈴「了解！」

三人で協力し黒いI Sを倒そうとする意気込みはいいが黒いI Sが強く近距離武器しかない秋十と百春は黒いI Sの近くまで近づかず時間ばかり消費していた

そのころ一人の少年が電話で老人と思わしき人物と話しながらアリーナのピットまで繋がる廊下を歩いていた

? 「すみませんね、君に出てもらうことになってしまつて」

?? 「いえ、大丈夫ですこういうときのための僕なんですから」

少年は黒い髪に170はある身長、服装は警備員の服を着ており多分顔は整っている方なのだろうが目の部分を覆う目隠しが少年に様々なイメージを持たせる

目隠しは黒をベースに横に獣が爪で引っ搔いたような赤い横線と同じような一定間隔にひかれた縦線が描かれており少年をミステリアスにも不気味にも思わせる

? 「これが終わつたら何処かにご飯でも食べに行きましょうか」

?? 「ああいいですね、美味しいところをお願いします」

? 「わかりました、では御武運を一夏君」

一「はい、それでは」

携帯を切り一夏はアリーナに出ようとする

この戦いを終わらせ、義父の轡木十蔵と飯を食べに行くために

アリーナではボロボロの三人と沢山の傷がついた黒いI Sが未だ戦っていた

秋「テヤアツ！」

百「喰らえツ！」

鈴「ハアツ！」

戦つても戦つても勝敗はつかず疲労の色が明らかに顔に出始めた

そのときだった

アリーナのピットに人影が現れ黒い I S に声をかける

一「すみませーん、警備員をやつてる轡木一夏と言うものですがー！迷惑なのでとつと出ていって貰えませんかー！」

その声に反応し黒い I S が顔をらしき部分を向ける

それと同時にありえない名前を聞いた二人と警備員がこんなところにいることにビックリした鈴が顔を向ける

そして鈴以外の二人は一夏に向かって罵倒をし始める

秋「テメエ何で生きてやがる！出来損ないのクセに！」

百「そうだ！テメエが何でこんなところにいやがる！」

そんな二人を無視して黒い I S に声をかけ続ける

一「すみませーん！出ていかなかったら手荒な真似をするしかなくなるんですけどー！」

黒い I S は一夏をじつと見つめるだけでピクリとも動かない

振り向き一夏から目を離し動かない黒い I S に勝機だと思つたらしい鈴が殴り飛ばされ罵倒をしていた織斑兄弟を巻き込み壁に再び衝突し三人とも気を失う

一「仕方ないからやりますかねー」

一夏がピットからアリーナに下り黒い I S に近づきながら相棒の一人を呼ぶ

一「二世！」

すると黒いコウモリに似た生物、キバットバット二世が一夏に近づき話しかける

キ「何だ、一夏」

一「力を貸してくれアイツをぶっ倒すぞ」

キ「了解した、おいそのデカブツ」

キバット二世が黒い I S に話しかけそれに黒い I S が反応する

キ「ありがたく思え、絶滅タイムだ！」

一夏がキバット二世の前に腕をだしその腕をキバットが噛む

キ「カブリッ！」

それと同時に顔にステンドグラスのような模様が現れ腰に鎖が巻

き付き黒いベルトに変わる

一夏が腕を噛んだキバット二世を掴み反対にしてベルトの真ん中にはめ込む

一「変身！」

キバット二世から緑の波紋が出て一夏の姿が変わる

黒と赤をベースに深い緑の目、頭部にはコウモリの羽に似た意匠が凝らしてあり背中には黒いマントを羽織っている

一夏は魔界を統べる王、ダークキバに変身した

一「行くぞッ！」

一夏は走り跳躍力のみで黒いISのいる位置に到達し踵落として地上に落とす

そして急降下し勢いをつけ拳で追撃する

一「ハアッ！テヤッ！」

だがISの方も静かにしているわけがなくレーザーで応戦してくる

そこで一夏は懐からあるものを取り出す

一「近づけないならこいつを使うか」

それは取手しかない剣の様な物だった

恐らく使い方の知らないものは使えないであろう代物

なんの用途のために作られたのか全くわからない代物であった

一「行くぞ！」

一夏が取り出したもの、ジャコーダー手首だけで振ると赤い刀身の様な物が出てくる

立ち上がった黒いISに数メートルは離れている位置からジャコーダーを振る

すると刀身が伸び黒いISに当たり火花が出る

一「フッ！ハッ！ヤッ！」

ジャコーダーを何度も振り黒いISに次々と傷をつける

一夏は振るのをやめフェンシングのように構える

そして関節部を狙いジャコーダーを突き出す

すると刀身がまた伸び関節にダメージを与える

そのままジャコーダーを振り上げ腕を切り落とす

すると黒いISが片膝をつき動きが鈍くなる

一「キバットもう終わらすぞ」

キ「了解した」

一夏は腰のフェッスロットから白いフェッスルをキバットの下顎を上げセットして噛ませる

キ「ウェイクアップワン！」

すると空に赤い紋章が現れる

一夏は再びジャコーダーを構えISのボディを貫きジャンプして紋章に入り別の部分から出てくる

ジャコーダーを引っ張りISを宙に浮かせる

ISが飛ぼうとしてもスラスターがすでに壊れているので不可能である

そして一夏がジャコーダーの柄の部分から魔皇力を流して内部から破壊してゆく

ISは耐えきれず粉碎した

そして闇のキバはISのコアを回収しピットから帰っていった

2話

一夏は今IS学園の1番上の階にある学園長室の前にいる
重厚感のある木製の扉、ここに来るまでに刀を振り回すモップを避
けたり、元姉にあつたりしているのだが本人は全く気にしていない
寧ろ覚えているかすら怪しいが

それはさておき一夏が扉をノックし返事を待つ

? 「どうぞ」

返事が返ってくると思えば扉を開け部屋に入る

一 「失礼します。先程の件なのですが」

? 「はい、どうしましたか?」

部屋の中は中央に前側に来客用のソファとテーブルそしてその
奥に作業用の机と椅子がありそこに座っている目が開いていない老
人が学園長であり一夏の義父の轡木十蔵である

書類作業をしていたのだから机の上には数十枚のさまざまな言葉
で書かれたプリントがある

一夏は十蔵に近づき机の上にさっき回収したある物を置く

十 「コレは?」

一 「襲撃してきたISのコアです。おそらくどこの国の物でもない
と」

十 「ほお…」

一 「どうしましょう、明らかに厄介しか呼び込まないと思われま

十 「おそらく各国が欲しがるのでしようからねえ」

一 「ですので一応私が持つておこうと思っ

十 「それがいいでしょう、そういえば一夏君明後日転校生が来るの
を知っていますか?」

一 「また…ですか?」

一夏は露骨に嫌そうな顔をする

十 「しかも二人もいますよ」

一 「…面倒な」

十 「ハツハツハ、確かに面倒ですなあ」

しかめっ面の一夏に対し十蔵はにこやかな笑顔である

十「まあ何かあった時は対処をお願いしますよ」

一「絶対何かあるんでしよう？どこの国の奴らなんですか？」

十「ドイツとフランスの代表候補生だそうですよ」

一夏に二人のプロフィールを渡す

まずはドイツの転校生のプロフィールを見る

一「ラウラ・ボーデヴィツヒ：軍人で駄姉の元教え子ですか、実に面倒そうな子だ」

十「しかも織斑先生を狂信的に信じているとか」

一「：関わりたくねえ」

十「素に戻る程嫌ですか？」

一「明らかに面倒ごとしか運んで来なさそうなのでねえ」

十「ハツハツハ」

一「笑い事じゃ無いですよ、えーともう一人のほうは：男？」

十「らしいですよ」

十蔵は微笑んでいる

一「結局どつちも面倒事じゃないですか、シャルル・デュノア、デュノア社社長の息子さんですか：ぜってえ嘘ですねコレ」

十「流石ですねえ、更識に調べてもらったところシャルル・デュノアなんて子供はいないんですよ」

一「じゃあこの子は？」

十「社長の愛人の子にシャルロット・デュノアさんという女の方がいらつしやるそうですよ、その子を最近引き取ったそうで：」

一「腐ってますなあ、ちよつとフランス行つてきてイイツすかねえ？」

プロフィールの紙からグシャ、と音がする

十「いいですよ」

一「へいへいじょーだんですよって、え？」

一夏がポカンとした顔になる

十「行つてきていいですよ」

一「あー、ホントに？」

十「はい」

一「何で？」

十「私はね子供を道具と思っっている親は一度痛い目にあった方がいいと思うんですよ」

十蔵は微笑んでいるが雰囲気だけで怒っているとわかる

少し開いた目から濁った目が見え一夏は珍しいと思った

十蔵は基本微笑んで和やかな雰囲気を纏っているがそんな人でもやはり怒るんだなと思った

十一「ですから一夏君ちよつとデユノア社にバレない程度でオシオキしてきてくれますかねえ？」

一「了解ですちよーつと絶望させてきます、フフフフ」

十「フフフフ」

一十「フフフフ」

こうしてデユノア社に私怨がすこーし籠った制裁が加えられることになった

この時学園長の部屋の前を通った人曰く何か禍々しい気が発せられていたとか何とか

3話

デュノア社本部はISの武器の実験などの危険もあるため、人里離れた森の中に建っている

デュノア社は6階建てのビルとなっており一階がロビーに二、三階がIS以外の事業のオフィス四、五階がIS事業のオフィス、六階が広々としたパーティーホールとなっており会社にパーティーホールがある理由は他の所を使うより自社でした方が警備にISを使えるしコストが低くなるという理由である

ちなみに現在は前の話の五、六日後でシャルル・デュノアが転校する前日である

パーティーにはフランス政府の重役も出席しているためデュノア社の警備は全員駆り出されて警備に当たっているのであった

所変わってデュノア社のロビー玄関前二人の警備員が銃を持ちながら警備に当たりながら話をしていた

警1 「あーったく暇だなあ」

警2 「滅多なことを言うんじゃないよ」

警1 「どうか知ってるか？今回のパーティー、ちと早いデュノア社の経営危機脱却の祝いだったよ」

警2 「息子がIS使えるってわかった遅い祝いじゃなかったのか？」

警1 「ばっかそれは表の事情って奴だよ、どうやら社長の娘を息子って騙して男のIS操縦者のデータを盗むんだとよ、それに一枚噛んでる奴らが今日のパーティーにお呼ばれしている連中だとよ」

警2 「オメエなんでそんなこと知ってたんだよ」

警1 「偶々聞いちゃったんだよ、バレたら消されるかもなあ、ハハハハハ！」

警2 「テメエ！なんでそんな話オレに聞かせやがった！」

警1 「これで俺たちは一連托生って奴だな、ハハハハハ！」

警2 「笑い事じゃねえってんだ！全くよお」

その時十数メートル離れた先の茂みがガサガサと揺れる
警1 2 「ツツツ!!」

二人は気を引き締めて揺れた辺りを凝視する

警2 「揺れた、よな？」

警1 「ああ、揺れたな」

警2 「どうするよ」

警1 「ちよつと見てくる」

警2 「やめたほうがいいんじゃないのか？」

警1 「それでも行くしかねえだろ」

警2 「無事を祈る」

警1 「ああ、頼んだぜ」

そーつと銃を正面に構えながら揺れた茂みに近づくと

そして茂みを手でかき分け調べる

警2 「なんかあったか？」

残った警備員が聞くと何もないとわかったようので此方を向こうと
する

その瞬間茂みの中から腕が出てきて警備員の足を掴む！

警1 「！なんだこれ、ウワアツ！」

その腕は掴んだ警備員をすぐさま茂みに引きずり込み辺りは何も
なかったかのように静かになる

残った警備員はパニックになった

今まで喋っていた相手が何者かに襲われて更に自分も襲われる可
能性があると状況なのだ余程慣れた傭兵なら平気だろうがここに
いるのはただの警備員パニックにならないほうがおかしい

故に銃を構えて周りを警戒する

何かあった場合すぐにでも発砲出来る様に

すると突然『デンジャー！』と声がして辺りに不気味な音楽鳴り響
く

警2 「ツツツ！今度は何だ！」

次にまた同じ声で『クロコダイル！』の音がして不気味な音楽に更
に不気味な音楽が合わさる

警2 「何なんだよ！出てくるならとつと出てこいよ！なあ！」
ガギンと金属と金属がぶつかり合った様な音がしてまた音が響く
『割れる！喰われる!! 碎け散る!!!』

碎け散るの声と共にガラスの割れる音が聞こえる

警2 「なんだって言うんだよ！畜生！」

『クロコダイルインローグウ！オーラア！』

そして再び割れる音と共に揺れた茂み奥辺りに青い複眼とその少し右下の所に丸く青い光が現れる

警2 「うわアアア!!」

警備員は自暴自棄になり目を瞑りながら複眼に向かって銃を放ち続ける

だが当たっても何もないかの様に悠然と警備員の方に向かい歩いてくる

そして警備員の前まで来るとロビーの灯りでその姿が現れる

ベースカラーは紫と黒、胸から腹筋に掛けて割れた様なヒビが白で演出されており、顔は顎からワニが喰らい付いた様になっており顎の関節からヒビ割れたデザインとなっている

顎のワニは一応右側だけ目がありそれが青く不気味に光っている

肩の装甲はワニの尻尾の様なギザギザがついており腰にはレンチと注射器の様な器具が取り付けられた青いベルト、スクラッシュドレイバーが装着されており装填スロットには紅く光るヒビが入った紫のボトル、クロコダイルクラックフルボトルがセットされている

それは更なる力を求めた男が挫折の末にたどり着き、変身した希望を砕くライダー、仮面ライダーローグ

それが今子供餌とし利益を得ようとする外道達を喰らいつくさんと牙を剥く！

4話

一（フー、まずはロビー玄関前制圧つと）

そう考えながらローグが銃を乱射していた警備員の意識を首を締め落とす

知つての通りローグに変身しているのは我らが一夏さんだ

一応先に倒した警備員を引きずって銃を撃った警備員の上に投げ捨てる

それと同時にサイレンが鳴り社内の通路や窓、玄関口などの緊急隔壁が締まり始める

一（あんだだけ派手に銃を乱射されたら流石にバレちゃうかあ）

だが一夏は全く動じていなかった

一（まあ壊せばいいし、隔壁のお陰で囲まれる危険性がなくなったしいいか）

鳩尾の前あたりで左の掌を殴り気合いを入れる

一「さあて、最高に素敵なパーティーをしようか」

青い複眼が一層強く光った

所変わって一階階段前には十数人の警備員がロビー敵の方向の隔壁に向かって銃を構えていた

全員緊張しているのか誰も喋らずジツと敵が来るのを待っていた
メキメキツ！

警全「二!!二」

おそらく敵が何らかの方法で隔壁を壊した音が微かに聞こえた

それにより緊張感が増し警備員達の体が強張る

メキツ!!

警備員達の前の隔壁がいびつに歪む

隔壁は拳がめり込み、叩き込まれた所から山のように盛り上がった奇形に変形している

それを目撃した警備員達の顔が真っ青に変わる

ISの攻撃で変形しない隔壁を拳一発でここまで歪ませる
そんなことが出来るバケモノなど烏合の衆がどれだけ集まったと
ころで勝算などない

警備員達が恐怖で顔を歪め逃げようと踵を返した瞬間

メキバキツ!!!

と、音がしてそれと同時に後ろからの強い衝撃で気を失った

一（ここが二階への階段か）

隔壁を殴り破壊したローグは少し疲れている様に見える

一（さっさと終わらしてホテルのベッドで寝てえなあ）

少し手首を回して自分の頬らへんを叩き、首元にあるボイスチェン
ジャーを起動させやる気を出すために声を出す

ロ『サテ、ヤルトスルカ』

階段を登り二階に着いた

二階には隔壁がなく階段までの道のりにも誰もいなかった

一（妙だな誰もいない、まあいいか）

気にせず三階への階段を上がる

そして三階に上がり次の階段までの廊下を歩いている時だった

警隊「撃てっ！」

ローグの後ろから大量の銃弾が発射される

だがローグの装甲ををただの銃じゃ破れる訳もなくローグは銃弾
が切れるまで銃撃の雨を耐え続けた

銃撃のせいで発生した煙で視界が遮られる

少しして号令をかけた男が周りに指示を出す

警隊「まだ奴は倒れていないはずだ！リロードいそ…」

『フルボトル!!』

突然音声がなりローグからお返しとばかりに大量の銃弾が警備員
に襲いかかる

そしてその銃弾に被弾した警備員達が叫び声を上げ倒れる

警隊「ッ、全員伏せろ！クソッ、ギャアアア！」

そう言いながら隊長らしき人が被弾し床に沈む

ロ『イガイニヤクニタツナ』

ローグは手に持った緑の歯車が埋め込まれた紫と金の機械的な造形をした片手銃、ネビュラスチームガンを眺める

その銃に付いている装填スロットには灰色のガトリングの銃口が模されたボトル、ガトリングフルボトルが装填されている

一（確か情報ではデユノア社のIS二機が警備に動員されている、気を引き締めてかかるか）

一夏は新たにスコープがついたバルブが融合した片手剣、スチームブレードを取り出し、バルブの後ろ側にあるボタンを押しながらスチームブレードの持ち手と刃を分離させる

そして持ち手をネビュラスチームガンの後ろ側に、そして刃の部分を銃口に取り付ける

『ライフルモード！ファンキー!!』

そうしてネビュラスチームガンがライフルモード合体させた

ロ『：イクカ』

一夏は四階への階段を登る

四階に上がり五階への階段の方に進む

5話

五階上がり何もなかったかのように歩み続けるローグの前に二人の女が現れる

片方は金のセミロングの髪に青い瞳、身長は170ぐらいの顔の整ったグラマーの部類に入る女性(女1)

もう片方は白い髪を肩甲骨の下辺りまで伸ばしポニーテールにした、身長が165ぐらいの同じく顔が整っておりさっきの女性よりも凹凸が激しい体つきをしている女性(女2)

二人はローグを見て

女1「アンタね襲撃者って、私戦いたくないんだけど、でも」

女2「へー、面白い格好しているねえ、もつとじっくり見たいんだけど今はいいや」

そう言いIS、ラファール・リヴァイブを纏う

女1「お仕事だから仕方ないわよね？」

女2「あなたを倒した後にはたっぷり見させてもらおうよ！」

女2がISのブレードで縦に切りかかってくる

それを左手のライフルモードのネビュラスチームガンの刃で受け止める

女2「!その姿は伊達じゃないって事かなあ！」

そのまま空いている右手で腹部を殴る

だが女2もただやられるわけもなく素早くブレードを離し両腕で腹部をかばう

女2「ウグッ！」

殴られた女2が後ろに殴り飛ばされて壁に衝突する

女2にはダメージはほとんどないため立て直して向かってくる前に仕留めるためにネビュラスチームガンで狙うが

女1「忘れてもらっちゃあ困るわ！」

女1は両手にアサルトライフルを持ちローグに乱射する

ローグはネビュラスチームガンを上に投げ、ベルトの装填スロットのクロコダイルクラックフルボトルを抜き、新たに取り出した水色の

輝くダイヤモンドを模したフルボトル、ダイヤモンドフルボトルを装填スロットに入れる

『アイスチャージボトル!』

そしてベルトに付いているレンチを下に下げる

『ツ・ブ・レ・ナーイー! デイスチャージクラッシュ!!』

ローグは顔の前で腕を交差して頭を守る

銃弾がローグに大量に当たりローグを吹き飛ばし壁にぶつかり壁を破壊して地面に倒れる

女1の横に殴り飛ばされた女2が戻ってくる

女1「やったかしら?」

女2「やられてると嬉しいなあ」

そんな二人の希望を裏切り何もなかったかのように立ち上がる

ローグにダメージは見受けられず首に手を当てゴキゴキ鳴らしながらネビュラスチームガンが落ちているところまで歩く

ロ「:スコシイタカッタ」

女1「少しかあ、てか喋れるのね」

女2「そんな余裕だったら倒せる自身がなくなるよ」

ロ「:ナラミチヲユズツテホシイ」

女1「譲ってあげてもいいけどこれもお仕事なのよねえ」

女2「なら新しい仕事紹介してくれたらいいよー」

ローグは二人の軽さにビックリする

ロ「:コノシゴトガキライナノカ?」

女1「別にこの仕事は嫌いじゃないわ、でもこの会社は嫌いよ」

女2「シャルロットって言ったっけ? まあいいや、女の子を物として扱っているところなんて好きになれるわけ無いでしょー?」

ロ「ナルホド」

ローグは少し考える

ロ「:スコシマテ」

女1、2「?」

ローグは独特の形状のスマートフォンを取り出し後ろを向いてどこかに電話をかける

ロ「アー、オレダ、チョットシタソウダンガアツテナ」

そのまま数分話し続け、電話を切り二人の方に振り向く

ロ「シゴトヲヨウイデキルガ：ドウスル？」

女1「本当に!？」

女2「すごい」

二人は後ろを向いて肩を組み小声で話し始める

話し終わったのかローグに向き直り質問をする

女1「どんな仕事かしら？」

ロ「ケイビノシゴトダナ」

女2「衣食住はー？」

ロ「キルモノイガイハホシヨウスル」

再び後ろを向いて話し合う

二人が半分だけこちらを向き最後の質問をする

女2「あのお」

女1「お給料って」

女2「いくらぐらい」

女1「貰えたらするのかしら？」

ローグはうつむき考える

顔を上げ質問の返答をする

ロ「〇×ドルグライダ」

女1、2「行くっ!!」

即答だった

ちなみにドルで例えたのは円よりを親しみがありそうだからである

ロ「：ワカツタ、オワツタラムカエニイク、シタデマツテイロ」

女1「わかったわ」

女2「わかったよ」

そう言い二人は下り階段の方へローグは上り階段の方へ向かう

ローグは止まり二人の方に向き質問をする

ロ「オマエラ、ナマエハ？」

二人は振り向き名前を名乗る

女1 「私はフィール・グレイスよ」

女2 「私はエナ・タリシエンだよ」

ロ 「オレハ：アトデハナス」

「そう言い前を向き歩き始める

フィールとエナも再び歩き始める

ロ 「アア、エナ、フィール」

「ローグがなにかを離そうとしたので二人が歩くのをやめ振り向く

ローグは手を上げて別れの挨拶をする

ロ 「チャオ」

「そう言っ次次の階に足を進めるのであつた